ペルシア語の強勢を伴わない接尾辞-i について

石原　拓海
（南・西アジア課程 ペルシア語専攻）

キーワード：ペルシア語，接尾辞，定不定

0. はじめに

本稿は、ペルシア語の接尾辞-i の用法と、それぞれの用法の出現頻度を明らかにすることを目的とする。

ペルシア語[1]の接尾辞-i には強勢を伴うもの[2]と強勢を伴わないものが存在するが、本稿では強勢を伴わないものを扱う。なお、外国語で書かれた文献の和訳・例文番号・文中のグロスは、特に断りのない限り筆者によるものとする。文献によって異なる音韻表記については、Windfuhr and Perry(2009)を参考にした転写方式に則って、統一することとする。

1. 先行研究

Mahootian(1997: 32-34, 203-205)によると、-i には名詞句の不定を表わす用法と関係節を導く用法が存在する。Windfuhr and Perry(2009: 432, 485-486)によると、-i には不定の用法と関係節を導く用法と特定性に関わる用法が存在する。吉枝(2011: 49-51)によると、-i は不定を表わす場合、トピック紹介を表わす場合、程度の軽微さを表わす場合、「～につき」を表わす場合がある。

先行研究の記述をまとめたものを以下の表 1 に示す。

表 1: 接尾辞-i の用法別説明の有無

	Mahootian(1997)	Windfuhr and Perry(2009)	吉枝(2011)
不定	○	○	○
特定	×	○	×
指示的用法・トピック	○	△(類似記述有)	○
程度の軽微さ	×	×	○
割合・割り当て	×	×	○

(Mahootian 1997, Windfuhr and Perry 2009, 吉枝 2011 をもとに筆者作成)

[1] ペルシア語はインド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派イラン語群に属し、イランおよびその周辺諸国で計 1 億 1 千万人に広く使用されている。文字は、アラビア語にない音(/p, č, ž, g/)を表記するための 4 つの文字(پ =/p/ , چ =/č/ , ژ =/ž/ , گ =/g/)をアラビア文字に加えた計 32 字のペルシア文字を使用する。ペルシア語には母音/a, e, o, ā, i, u/（通常 ā, i, u は長めに発音される）と二重母音/ey, ow/ と子音/p, b, f, v, m, n, t, d, s, z, š, ž, č, j, r, k, g, q, x, ʾ, h, l, y, w/ がある。基本語順は「（主語）＋（目的語）＋動詞」である。(Windfuhr and Perry 2009: 416- 430, 479 要約)

[2] 例として、修飾の-i は強勢を伴う。名詞の後につけて形容詞を作るときなどに使われる。例: qave「コーヒー」, qave-i「茶色の」(以上 Mahootian 1997: 276 要約)

表 1 に示したように、吉枝(2011)のみが程度の軽微さ及び割合・割り当てを表現する用法について言及している。Windfuhr and Perry(2009)のみが特定の用法について言及している。

先行研究によると、-i には不定の用法と指示的用法という一見相反する特徴がどちらも存在するとされている。

それぞれの用法についての説明は豊富に見受けられるが、それぞれの用法の使用頻度についての記述は、管見の限り存在しない。

なお、本稿においての不定・定の定義は、相原(2015)『明解言語学辞典』のものを用いている。以下にその内容を引用する。

> 定性は、名詞句の指示対象が同定可能かどうかによって名詞句を区別する概念であり、聞き手が指示対象を同定できると話し手が想定している名詞句は定（definite）であり、同定できないと想定している名詞句は不定（definite）である。
>
> （相原 2015: 158 引用）

2. 調査

卒業論文では、新聞と説話集を用いて、-i のつく名詞句を手作業で抽出した。

2.1. 調査 1 とその結果

イランの新聞紙 *Iran* の Web 公開版(2015/06/22 付)の 1 面(総語数 3032)を用いて、-i のつく名詞句を抽出し、修飾句が先行するもの、関係節が後続するもの、修飾句が後続するもの、修飾句が接続しないものに分類し、数を集計した。

結果を表 2 に示す。-i のつく名詞句は全部で 53 例見つかった。

表 2: 調査 1 結果

関係詞後続	23
修飾句後続	19
修飾句無し	8
修飾句先行	2
修飾句先行 ＋ 関係詞後続	1
計	53

最も多くみられた用例は関係節が後ろに続くものであった。修飾句が後続するものがその次に多く出現している。修飾句を持たないものや修飾語が先行するものは他の二つと比べてかなり少ない。

おおむね、修飾句がないものは不定的であり、関係節や修飾句が接続するものは限定されているため定的、または先行研究の指摘する指示的な用法であると解釈できる。そのため、伝統文法で指摘されているという記述が見られた不定の用法は、今回の調査では 53 の用例のうち 8 と、かなり比率が低いことがわかる。

この結果から、新聞においては-i の用法は定的な特徴を多く見せる傾向があるといえる。

以下に代表的な用例を定的なものと不定的なものからそれぞれ一つずつ挙げる。本稿で扱う接尾辞-i のつく名詞、および対応する日本語訳を太字で、-i のつく名詞を修飾している語句を括弧で表わした。

(1) *in* *šahr* ***sābeqe-ʾi*** [*tulāni*] [*dar* *mobārezāt-e* *madani* *barāye* *ehqāq-e*
this city background-I long in struggle.PL-EZ civil for protection-EZ

hoquq-e *siyāhpust-ān* *dar* *āmrikā*] *dār-ad.*
right.PL-EZ black skin-PL in America have.PRES-3.SG

“この街は[アメリカにおける黒人権利擁護のための市民闘争に関して][長い]**歴史**を持つ。”

“持つ”という動詞の目的語である“歴史”という名詞に“長い”という形容詞と“アメリカにおける黒人権利擁護のための市民闘争に関する”という修飾句が接続し、どんな“歴史”かが限定されているため、“歴史”は定的である。

(2) *ammā* *aksariyat* *budan-e* *kešvar-hā-ye* *kuček,* *bayāngar-e*
but majority be.INF-EZ country-PL-EZ small demonstrative-EZ

čiz-i *nist* *joz-e* *in* *vāqeʾiyat* *ke* *aksar-e* *kešvar-hā-ye* *jahān* *yā*
thing-I NEG.be.PRES.3.SG except this fact REL most-EZ country-PL-EZ world or

aksariyat-e *aʾzā-ye* *sāzmān-e#mellal* *kešvar-hā-ye* *kuček* *hast-and.*
majority-EZ member.PL United Nations country-PL-EZ small be.PRES-3.PL

“しかし小国たちが多数派であるということは、世界のほとんどの国や、国連加盟国のほとんどが小国であるという事実以外、**何も**示唆しない。”

これは後ろに否定語を伴って、英語の any のような意味を表す用法の例である。-i のついた名詞“こと”はその具体的内容を想定して発話されていないと予想でき、不定的である。

2.2. 調査 2 とその結果

調査 2 では、テキストの内容が偏る可能性を考慮し、新聞と文体の異なる説話集を用いて-i のつく名詞句を抽出した。本調査では、イランの民衆文学である黒柳・日下部訳注(1989)『モッラー・ナスロッディーン物語（イラン笑話集）』を使用した。

『モッラー・ナスロッディーン物語』は、アラビア文学・ペルシア文学・トルコ文学の民衆文学にそれぞれ違った名称の主人公で共通して伝わる多数の作者不明の滑稽話を集めた説話集である。主人公の名称はアラビア文学では「ジュハー」、ペルシア文学では「モッラー・ナスロッディーン」、トルコでは「ナスレッディン・ホジャ」であり、それぞれの人物に関する物語にはかなりの類似が見られる。だがそれぞれ同じ人物を指しているか否か、彼らが実在したか否か、具体的にいつ頃の物語かという情報に確実なものはない。本資料

は古今のさまざまな書物から約 600 の話を集めたラマザーニー編(1954)『モッラー・ナスロッディーン』を主な底本とする、黒柳・日下部による 100 個の物語の訳注書である。

（以上 黒柳・日下部訳注 1989 解説 vi-x 要約）

数十年前の資料であるが、現代ペルシア語で書かれており、日本語訳が付され内容の解釈の助けになると判断したため、同書を資料に用いた。

この資料の p. 2-101（100 収録された物語のうち 59 にあたる）を用い、手作業で-i のついた名詞（句）を抽出し、調査を行う。抽出した-i のつく名詞（句）は 217 例である。

どの先行研究においても不定を示すという記述が見られる-i の特徴を検証するため、現れた例の持ついくつかの特徴に注目して、分析する。その諸特徴を、より不定的な関連を持つものと定的な関連を持つものに分け、分析対象とすることにした。以下にそれぞれの特徴を示す。

・不定的特徴
初出
主に否定の動詞とともに用いられ、「少しも」などを表わすもの
集団の一部分

・定的特徴
関係節が後続するもの
修飾する語句がついて限定されているもの
rā（通常定の直接目的語を示す後置詞）[3]が後続するもの
代名詞につくもの

・その他
名詞について「少し」「かなり」など程度の大小を表わすもの
複合動詞の名詞部分についてその動作の程度の大小を表わすもの

抽出した用例の数を以下の表 3 に示す。

[3] Windfuhr and Perry(2009:485) 要約

表 3: 調査 2 結果

	特徴	用例数
不定的特徴	初出	122
	「少しも」などを表わすもの	23
	集団の一部分	19
定的特徴	関係節が後続するもの	53
	修飾語句がついているもの	22
	rā が後続するもの	11
	代名詞につくもの	1
その他	名詞について程度の大小を表わすもの	17
	複合動詞の名詞部分につくもの	13
-i がつく名詞句		217

調査に用いたこれらの特徴は相補分布的ではないため、一つの用例が複数の特徴をもつものも多くある。

こちらは新聞を用いた結果とは異なり、全体を通してもっとも多く見られた特徴は不定的特徴の初出である。そのうち 57 の名詞は修飾語句が接続せず、同定を可能にする限定要素が特に少なく、不定的である。

定的特徴を持つ用例の中でもっとも出現頻度の高いものは、調査 1 においてももっとも出現頻度の高かった関係節が後続するものであった。

紙幅の都合上、以下に代表的な例のみ示す。日本語訳は調査に用いた黒柳・日下部訳注(1989)から引用した。本稿で扱う接尾辞の-i がついた名詞句とその部分に該当する日本語訳は太字で示した。用例および日本語訳の最後の( )内に黒柳・日下部訳注(1989)におけるページ数を示した。

・不定的特徴を持つ名詞句の例

(3) ***šab-i*** ***dozd-i*** *be* *xāne-ye* *molla* *āmad.*
night-I thief-I to house-EZ Molla come.PAST.3.SG
“**或る夜**、**泥棒**がモッラーの家に入った。”(p. 32-33)

この用例は不定的特徴のうち、初出に該当する。話において初めて登場する舞台、人物であることにより、同定可能な誰かを想定していないと判断できる。さらにこの二つの用例の場合は、修飾語句が接続していないことも不定的特徴を顕著に表わしている。

(4) *xub* *ast* *u* *rā* *be-baxš-id* *va* *az* *u* ***kine-ʾi*** *be* *del* *na-gir-id.*
good be.PRES.3.SG he DO IMP-forgive-2.PL and from he hatred-I to heart NEG.IMP-get-2.PL
“彼を許し彼に**恨み**を抱かないのが良い。”(p. 76-77)

こちらの例は-i が英語の any のように機能し、「一切の」や「少しも」というニュアンスを表わしていると判断できる。不定的特徴のうち、主に否定の動詞とともに用いられ、「少しも」などを表わすものに該当する。

・定的特徴を持つ名詞句の例

(5) *agar* *bāvar* *na-dār-id* ***qāz-hā-ʾi*** *ke* *dar* *kenār-e* *estaxr* *istāde-ʾand*
if belief NEG-have.PRES-3.PL goose-PL-I REL in side-EZ pool stand.PART-be.PRES.3.PL

negāh#kon-id.
look#do.IMP-2.PL
“お疑いなら池の端に立っている**鷲鳥**を御覧になって下さい。”(p. 20-21)

こちらの例は、モッラーがある人物に「この町のガチョウは一本足である」という趣旨の嘘をついた直後のモッラー自身の発言である。会話している二人の見える位置にガチョウがおり、それを指しているので定的要素が非常に強い。定的特徴のうち、関係節が後続するものに該当する。

(6) *molla* *belā-fāsele* *barxāst* *va* ***tekke-ye*** ***čub-e*** ***boland-i*** *rā* *ke*
Molla without-interval get up.PAST.3.SG and stick-EZ wood-EZ long-I DO REL

dar *guše-ye* *otāq* *nehāde* *bud* *be#dast#gereft* *va* *goft.*
in corner-EZ room put.PART be.PAST.3.SG to#hand#get.PAST.3.SG and say.PAST.3.SG
“モッラーは直ぐ立ち上がり部屋の隅に置いてあった**大きな棒**を握って言った。”(p. 44-45)

こちらの例では、-i がついた名詞句は話に初出であり同定することは不可能であるが、関係節を伴って限定されているため、定的な特徴を有する。

・その他の例
(7) ***qadr-i*** *touzih#be-deh* *tā* *be-gu-yam.*
extent-I explanation#IMP-give.PRES.2.SG so that SUB-say.PRES-1.SG
“わしが答える為に**ちょっと**説明してくれ。”(p. 16-17)

こちらの例では-i のついた名詞が動詞を修飾する副詞の働きをしている。単体では qadr “量、程度”を意味するが、-i がつき“ある程度、ちょっと”といった意味になっている。吉枝(2011)で指摘されている程度の軽微さを表わすものと考えられる。その他の特徴のうち、名詞について「少し」「かなり」など程度の大小を表わすものに該当する。

(8) *molla* ***fekr-i****#kard* *va* *goft*
Molla thought-I#do.PAST.3.SG and say.PAST.3.SG
“モッラーは**ちょっと考えて**言った。”(p. 22-23)

もし-i が接続していなかった場合、この複合動詞（fekr kardan）は単純に“考える”という意味を表わす。その他の特徴のうち、複合動詞の名詞部分についてその動作の程度の大小を表わすものに該当する。

3. まとめ

今回の二つの調査では-i の使われ方に相違がみられた。修飾語句が無いものと関係節が後続するものの出現傾向の相違は、調査した資料のジャンルの違いを反映しているといえる。特に今回の調査に用いた『モッラー・ナスロッディーン物語』は短編の話を 100 集めたもので、それまでに登場した（つまり定的である）人物・事物が再び現れるということがほとんどないため、同定の困難な（つまり不定的である）名詞句が頻出し、特に顕著に差が表れたと筆者は予想する。修飾語句の接続しない（つまり不定的特徴のみを持つ）-i の名詞句が新聞においては 53 例中 8 例（約 15%）のみ確認されたのに対し、物語においては 217 例中 57 例（約 26%）確認され、ジャンルによる差がはっきりと表れた。

今回の調査で、ペルシア語の強勢を伴わない接尾辞-i は、先行研究で指摘されている一見相反する用法を、複数同時に担うことが可能であることが確認できた。この問題に関する説明は特定性の概念を導入することによって説明が可能であると予想するが、今回の考察では扱わない。

定・不定と関連が薄いと考えられる用法も確認できたが、いずれも数が少ない。調査資料内の出現頻度のみを考慮するならば、接尾辞-i の用法は定・不定、つまり名詞句の指示対象の同定の可・不可に関わるものが主であるということがいえる。

4. 今後の課題

調査した資料の量が少なかったことから、先行研究において指摘されていた用法が全ては確認できないなど、結果に十分な信憑性を持たせることが叶わなかった点が調査の問題点である。今後の課題は、新聞・物語のみならず、幅広いジャンル、また書かれたもののみならず音声資料なども用いて-i の使われ方をさらに研究することである。

今回、調査において-i のついた名詞句がどの特徴に該当するかを、ペルシア語母語話者ではない筆者が、文脈や日本語訳に頼って判断するほかなかった。ペルシア語母語話者の解釈と一致していないことも十分に考えられる。より正確な判断のために、母語話者から

の聞き取り調査がさらに必要になると考えられる。Windfuhr and Perry(2009)において指摘されている特定の概念を、十分に取り扱うことができなかったことも今後の課題である。相原(2015: 158)によると、「特定性（specificity）は、話し手が特定の事物を想定しているか否かに関わる概念である。」とされており、こちらに関しての調査も母語話者による聞き取りが必要である。

略号一覧

複合動詞の語境界/1 一人称/2 二人称/3 三人称/EZ エザーフェ（修飾関係を表す連結辞）/INF 不定形/IMP 命令/NEG 否定/PART 分詞/PAST 過去/PL 複数/PRES 現在/REL 関係詞/SG 単数/SUB 仮定(subjunctive)

参考文献

日本語で書かれた文献

相原まり子 (2015) 「定性」斎藤純男・田口善久・西村義樹編. 『明解言語学辞典』 158. 東京: 三省堂.

吉枝聡子 (2011) 『ペルシア語文法ハンドブック』 東京: 白水社.

外国語で書かれた文献

Mahootian, Shahrzad (with the assistance of Lewis Gebhardt.) (1997) *Persian*, London: Routledge.

Windfuhr, Gernot and John R. Perry. (2009) Persian and Tajik, in Gernot Windfuhr(ed.), *The Iranian Languages*. 416-544. London: Routledge.

参考資料

黒柳恒男・日下部和子訳注. (1989) 『モッラー・ナスロッディーン物語（イラン笑話集）』. 東京: 大学書林.

インターネット上の資料

“Iran-newspaper.com” (http://iran-newspaper.com/ 最終閲覧日 2016 年 1 月 16 日)